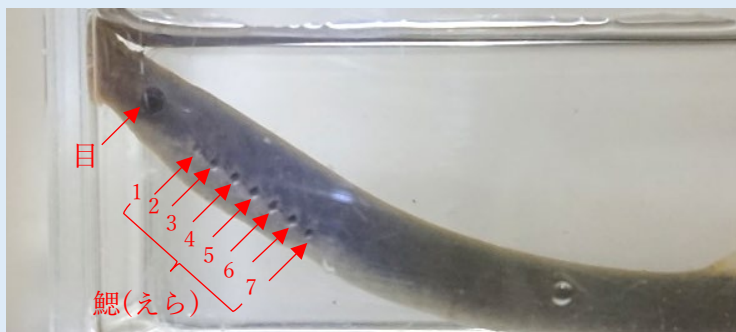


水環境館いきものトピック vol.5

ちんぎょほうこく
珍魚報告シリーズ

スナヤツメ

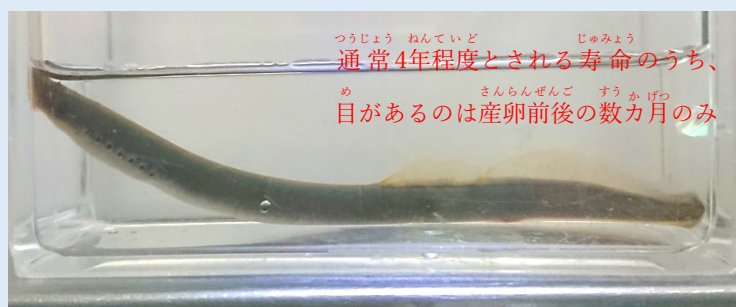
令和3年3月24日、市民の方から紫川上流にてスナヤツメを採取したとの連絡をいただきました。スナヤツメは原始的で独特な特徴を持つ生き物です。日本各地に生息しているものの個体数は少なく、また幼生期を過ごす泥や砂の堆積した場所が減少するなど、生息環境の悪化が進んでいることから絶滅危惧種¹にも選定されています。紫川をはじめ福岡県内でも数が減少しており、絶滅が心配されています。



スナヤツメはヤツメウナギ科というグループに含まれています。しかし、細長い体型はウナギに似ているもののウナギの仲間ではなく、頭の横にある7つの小さな鰓穴が目のように見えるため「目が8つあるように見えるウナギのような魚」という意味で名付けられました。



また、ヤツメウナギ類は背骨(脊椎)や顎を持たないため、「背骨と顎があり、一生を通して鰓呼吸する、鰭を持つ生き物」³を魚と定義した場合、魚の仲間には含まれないこととなります。実際、研究者によってヤツメウナギ類が魚かどうか議論されることもあります。魚図鑑やその他の文献でも、現在は魚として扱われています。



ヤツメウナギ類は「アンモシーテス」と呼ばれる、オタマジャクシに似た幼生期があり、主に泥の中で過ごします。やがて成長するとともに目や鰭が形成され、春の産卵期に合わせて生体へと変わる「変態」⁴をします。変態した後は餌を食べず、産卵を終えたのちに死んでしまいます。

1. 数が減少している生物をまとめたもの。国際自然保護連合(IUCN)や環境省、各都道府県などが生息状況などを踏まえて選定している。法律ではないため、選定された生物の捕獲や飼育等は規制されない。本種は環境省レッドデータリストで絶滅危惧Ⅱ類、福岡県のレッドデータリストで絶滅危惧ⅠB類に選定されている。

2. 背索という棒状の部位があり、かつ顎を持たない原始的な生物。古生代には繁栄していたが、現生種はヤツメウナギ類とヌナギ類のみ。

3. 現在は「背骨(脊椎)、顎、鰭を持ち、一生を通して鰓呼吸を行う生き物」を魚とすることが多い。たとえば干潟の陸上で見られるトビハゼは補助的に皮膚呼吸ができるものの、鰓呼吸が主なため魚の仲間。一方オタマジャクシは鰓呼吸をし、鰭のような部位も持つが成体になると手足が生え、肺呼吸をするため魚には含まれない。

4. オタマジャクシがカエルになるように、成長につれて姿かたちや生活スタイルが大きく変わること。

